

Title	初期書簡にみるエラスムス：『学習計画』（1512）理解の為の予備的研究
Sub Title	Érasme dans sa jeunesse d'après ses correspondances : une étude préparatoire pour la lecture de De ratione studii (1512)
Author	杉下, 文子(Sugishita, Ayako)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.55 (2002.) ,p.27- 38
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000055-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初期書簡にみるエラスムス～『学習計画』(1512)理解の為の予備的研究

Érasme dans sa jeunesse d'après ses correspondances
:une étude préparatoire pour la lecture du *De ratione studii* (1512)

杉 下 文 子*
Ayako Sugishita

De ratione studii (Le plan d'étude) (1512) est un des ouvrages pédagogiques qu'Érasme de Rotterdam (1469?-1536) a préparés pour ses élèves lorsqu'il était à Paris vers la fin du 15^{ème} siècle. L'oeuvre mérite une analyse attentive puisqu'il s'agit non seulement d'un plan d'étude dressé par Érasme en tant que précepteur, mais aussi d'un plan d'étude des belles-lettres pour l'humaniste lui-même. Mais comment est-il arrivé à formuler ce programme? A fin de saisir le chemin vers la composition du *De ratione studii* et de mieux comprendre sa signification, j'envisage dans ce travail de retracer d'après ses correspondances la vie sentimentale et littéraire d'Érasme depuis son séjour au monastère de Steyn vers 1487 jusqu'à son époque de précepteur à Paris.

En examinant la jeunesse d'Érasme, on peut y observer la naissance de ses idées pédagogiques basées sur une forte recherche de l'amitié solide: le jeune Érasme avait besoin d'amis avec lesquels "tout est commun". C'est entre amis, par de multiples dialogues et échanges, qu'on se cultive et qu'on évolue dans l'étude des belles-lettres. En effet, l'intention pédagogique est pour Érasme la prévenance principale pour ses amis qui vivent comme lui-même pour l'amour des *humaniores litterae* (les lettres qui vous rendent plus humain).

はじめに

北方ルネサンスを代表する作家エラスムス Desiderius Erasmus (1469?-1536) の最初の本格的な教育書と言える『学習計画』*De ratione studii* (1512) は、短いながらも示唆に富む著作で、彼の教育思想の研究にあたっては、十分な検討が要される。この著作は、イギリスの人文学者ジョン・コレット John Colet (1467?-1519) がロンドンに 1510 年に設立したセント・ポールズ校での教育実践用に捧げて出版されたものだが、草稿はそれに 15 年程も先立つパリ留学時代に家庭教師をしていた生徒達の為に書かれている。我が国の教育学研究ではこれまで、エラスムスの著作のうちより後年に発表された『子どもの教育について』*De pueris instituendis* (1529) に焦点が当てられることが多かったが、そこに

* 社会学研究科後期博士課程修了 (教育学修士)
現・リエージュ大学文哲学部歴史学科博士課程

繰り広げられる晩年の思想のより深い理解に達する為にも、その出発点にあるといえる『学習計画』の分析は不可欠であると考えられる。

『学習計画』の意義はそれだけにとどまらない。ここに示された教育プログラムはエラスムス自身の学習体験から選りすぐられた課程であり且つ、各所で提案されている生徒の為の諸教材は、実はエラスムスが生涯をかけて実際に生み出していく一連の著作に他ならない。つまりこの著作は、エラスムス自らの古典古代の学問、所謂「よき学芸」追求の為の理想の「計画」でもあるのだ。従って、これと同時期に発表された『文章用語論』*De duplici copia verborum ac rerum commentarii* (1512)、エラスムスが生涯を通じ版を重ねていく『格言集』*Adagia* や『対話集』*Familiarium colloquiorum formulae*、また『書簡文入門』*De conscribendis epistoris* (1522) など、16世紀を通じて諸学校で教材として重用される作品群を検討する際のレファレンスとしても『学習計画』は重要だと言える。

既に述べた通り、この『学習計画』はエラスムスがパリに滞在した1496年から1498年の間頃に生徒とのやり取りの中から生まれた。その後加筆訂正が加えられた上で著者の手によって出版されたのは1512年にパリのジョス・バード書店からのことであった。出版と言う形で正式に発表されるまでにかなりの時間が経っている以上、著作の背景としても草稿期から1512年迄のエラスムスを追うべきは当然のことである。しかしまた、ここに著わされる「計画」にはエラスムス自身の学習体験が反映されていると考えられることから、草稿以前の時期のエラスムスを検討の範疇に入れることも、著作をより深く理解する為には必要であろう。家庭教師として生徒を持つようになる以前、エラスムスはどのような人々と、いかなる人間関係を結んできたのであろうか。そして彼にとって、「よき学芸」の追求はいかなる意義を持っていたのであろうか。

本稿は、エラスムスがどのようにして『学習計画』の草稿を作り上げるに至ったのかを探ることを目的に、パリでの家庭教師期迄に至るエラスムスの様子を、現存する彼の書簡に追う作業の成果をまとめたものである。それは、青年期のエラスムス像を浮き彫りにする試みであると同時に、今後他の著作とつき合わせて『学習計画』を検討していく為の予備的作業でもある。具体的には、エラスムスがハウダ近郊ステインの修道院の修道僧であった1487年から、ラテン語指導の生徒達と頻りにやり取りをする1498年迄の間にエラスムスが様々な人々と交わした書簡を年代順に検討する。その際にはP. S. アレンにより20世紀初頭に編集出版された権威あるラテン語書簡全集(アレン校定版)第一巻⁽¹⁾と、後の研究成果も盛り込まれたその仏訳版⁽²⁾を用いる。また関連する先行研究としては、書簡の解読からエラスムスの姿を描き出したアルカンの研究『我がエラスムス』⁽³⁾とハイマの『若き日のエラスムス』⁽⁴⁾が挙げられるが、本稿では、後者の成果を参考としながら前者の方法に倣い、青年時代のエラスムスの思想や感情の揺れ動きへのより深い分析を試みる。

1. 友情を渴望するエラスムスと学芸への道～修道院時代初期

1.1 友を求めて(1487年)

両親をベストで失い3つ年上の兄とともに孤児となったエラスムスが、後見人達の勤めに屈して大学への進学を諦め、ステインの修道参事会修道院の門をくぐるのは、1486年か1487年のことと考えられている。

これ以前の時期エラスムスは、デヴォンテルやセルトーヘンボスで共同生活兄弟会の学校に通っていた。14世紀後半以来のオランダにおけるキリスト教刷新運動である「デヴォチオ・モデルナ(新しき

敬虔)」を精神的理想として掲げるこれらの学校は、基本的には中世的な性格のものであったが、デヴォンテルの聖レイブヌス教会附属学校を中心に幾人かの人文主義者達を教師として擁していたことも確かであった。エラスムスもこの学校に所属し、オランダにおける人文主義の先導者ルドルフ・アグリコラ Rodolphe Agricola (1444-1485) やアレクサンドル・ヘギウス Alexander Hegius (1433?-1498) らの恩恵に浴したはずであり、従ってステインの修道院に入る前に既に古典文芸への関心を獲得していたと考えられる。

今日に伝わるエラスムスの書簡のうち、最初の数通にもその様子は伺える。テレンティウス、ウェルギリウス、オヴィディウスからの引用によって飾られたそれらの手紙は、主として同じ修道僧仲間のセルワティウス・ロゲリウスに宛てられたものである。ここでエラスムスが表現を借りるラテン作家たちの役目は、セルワティウスに対する彼の想いを語ることにあった。

「僕の君に対する愛情は非常なものであってきたし今でもそうであり、君は僕の目よりも、魂よりも、僕自身よりも僕にとって大切だというのに、どうして君は君のことを世界中で最も好んでいる僕という人物に対して愛情も愛着さえも示さないほど冷酷なのか。君の心は君を憎む者を愛し、君を愛する者を憎む程までに無情なのか。(中略)

テレンティウスのこの言葉を君に手向けよう。

〈愛しの君よ、

何故僕と君は同じだけ愛してはくれないのだろうか

君が僕と同じだけ苦しんでくれるのならば

君の行動に僕さえ無関心でおれたなら〉⁽⁵⁾

家族の愛情を既に絶たれていたエラスムスは、熱烈に友情を求めた。エラスムスよりも少し年少であったと思われるセルワティウスは、その求めに対して冷ややかな沈黙を持って応えたのであろうか。彼からのエラスムスへの返事は一通も伝わっていない。

「蛇もライオンも犬も自分を愛してくれる人を愛するのに君と言えば君への愛に死にそうな人間を拒絶しているのだ。(中略)しかし僕がこんなにも悲しく執拗に懇願しているのは、君もよく知っているように何も贈り物や利益を得るためと言うわけではない。では何か。君のことを愛する者をただ愛してくれたまえ。これほどまでに容易で心地よく高貴な魂にふさわしいことはない。ただ僕を愛してくれたまえ。それで僕には十分なのだ。(中略)僕は自分の希望の全てを、人生の全てを、慰みの全てを君一人にかけてきた。僕の全ては、自らには何も残さず、君のものなのだ。』⁽⁶⁾

ハイマが指摘するように、ここでエラスムスが友に対して吐露している愛情は、内的静けさを尊重する兄弟会の教えや「デヴォチオ・モデルナ」の掲げる理想とは全く反対の性質のものである⁽⁷⁾。激しく愛情を渴望するエラスムスの筆致には、若くして身寄りをなくし、余儀無くされた修道院での生活の孤独を癒すべき信頼関係を強く求める様子が見て取れる。

1.2 古典学芸への高まる関心 (1488年)

「友無しには、生はもはや生たらずむしろ死を意味し、これを生と呼ぶねばならないならば、それは人間の為と言うより野蛮な動物の為に用意された哀れな生である。敢えて自分を評価すれば、僕は以下の事を断固として信ずる人間だ。つまりこの世で人は友情以外のものを好むべきではなく、これに対する以上に熱心には何事をも追求すべきではなく、これほど迄に気を付けては何もの世話をするともない。』⁽⁸⁾

実際の所エラスムスは生涯を通して友情に大きな価値をおき、それを必要とし続けるが、ごく初期の手紙に見られる上記のような感情的な激しさは姿を消す。ある時を境に、セルヴァティウスに対する語調自体、変化してくるのである。

ある日セルヴァティウスが悲しく浮かない様子でいるのを目撃したエラスムスは、翌日彼に手紙を書き送る。

「君をこれ以上そのままに放っておかない為に言うのだけど、もし君のエラスムスに、君に対する何らかの影響があるならば、万一君に僕の為に何かをしてくれる気持ちがあるならば、僕は、君が立ち直って、毅然としたところを示し、もう苦しみ続けたいよう望んでいるし、実はそれだけを祈っている。もし君が僕の意見を聞き入れていてくれたら、もうとっくに叶っていることなただけだね。そして今や、状況も、場所も、穏やかな天候も全てが学芸のために整っていて、文芸に専念するよう励まされているように僕には思える。君にまだ残っている無気力や怠惰を払い除けたまえ。もっと早くに取り組み始めておくのだった⁽⁹⁾

友が苦しんでいる姿を見るのに耐えられないエラスムスが差し出した助けは、古典学芸に向けての激励であった。愛情をせがんでばかりの態度から脱したエラスムスは、後輩への思いやりを、率直なアドバイスの形で綴っている。

「親愛なるセルヴァティウスよ、君が不精だとまでは言わないが、君の保っている平静さを見るにつけ、僕の驚きは日々つのるばかりだ。文芸に関するあらゆるものが我々に微笑みかけてくれているというのに、君が勉強に対して情熱を注がないのには、驚ききれぬ位だ。これは君に唯一欠けているものだがね。しかも君は無知であることで苦しんでいると言うではないか。一体君の決意たるやどんなものなんだい。(中略)君ときたら、期待を膨らませるだけで、寝ている間に神々がそれを実現してくれるとでも思っているのかね。(中略)もし君が、自ら言うように文芸に惹かれているのならば、君自身が行動に取りかからなくてははいけない。君自身が立ち会わなかったら、どんな神も人も君の役に立つ訳がないのだ。」

「これほど迄に豊富な写本を前にして、これ程までに多くの碩学の人々に居合わせてもらい、いやさらにはその好意にあずかっているながら、君の悠長な態度を正当化するだけの言い訳があるものかね。」

「だからこそ、親愛なるセルヴァティウスよ、これは確かなことなのだが、もし君が望むところのものを手に入れたいと願うならば(良識的に判断すれば、そう願うだろう)、君は僕の忠告に耳を貸さなければならぬのだ。まずは、僕に心を開いて生きることだ。友だちの間には何の秘密もあるべきではないと思うだろう。(中略)「友とは二つの身体に一つの心」⁽¹⁰⁾だから、疑わしい事について調べるのや、知らないことを認めるのに赤面なぞせずに、僕に心を開くだけの価値はあると思う。その次に君をさらなる段階に高めてくれるのは、今よりももっと、できるだけ頻繁に僕に手紙を書くことだろう。それもこれ迄やってきたように、ある時は聖ベルナルドスから、またある時はクラウディアヌスから乞うてきた様々な格言や、(もっとひどいことに)定型表現を不明瞭に積み重ねるのではなしにね。自分の文体にこうした筆を加えてみても、孔雀の羽を横取りしてくるカラスみたいになるだけだ。」⁽¹¹⁾ 借り物の言葉でではなく「天賦の才能とその時々ひらめきに忠実に」書き綴るのが一番だとするエラスムスは、こう続ける。

「粗野な表現を使ってしまったとしても恥じることはない。僕はあくまで添削をするのであって、からかおうというわけではないのだから。覆われたままの傷をどうやって癒そうというのだね。またどう

して君の持つところの物を、君よりもより明確に、より確実に知っている者に隠しておこうとするのだね。」

「もし君が愛するなら、否この僕をではなく、君自身を愛するなら、そして君自身の救済に何らかの心遣いをするのなら、僕の勧告に心を開いて、その無気力に揺さぶりをかけ、臆病を払いのけて、気骨の精神を見せてくれたまえ。そして遅すぎはしないのだから、仕事に自分で取り組んでくれたまえ。いつ迄明日をあてにして今日を巧みに避け続ける気かね。もうどれだけの時が、いわば君の指の間からこぼれ落ちていってしまったことか。4年も経つというのに、君は依然同じぬかるみを難儀して歩いているのだ。もし初歩から僕の意見に注意を払っていたならば、君は既に大人になっていて、綴る文章で僕に匹敵していたであろうことはおろか、逆に僕を教える立場にあったであろう。今となって、それでも失望してはいけないと僕は思うよ。刻苦勉励によれば失われた時も埋め合わせられるものだ。君の人生は未だ無傷のまま、力にも満ちあふれている。」

「この生き生きとした青春期が去ってしまう前に、今こそ老いてからの楽しみを準備すべく努めるのだ。」

〈故に確固たる精神を自らに養え、それは汝の美しさを支えもしようし、

これぞ唯一葬送の薪の山に至る迄持続するものなのだ。〉⁽¹²⁾

古典学芸への興味がエラスムスを満たしたのか、それともそれ以外に理由があるのかは判らないが、愛情に飢え苦しみ、それを渴望する一方であった彼がその問題を克服し、異なる精神的段階に至ったことはアルカンも言う通り明らかであろう⁽¹³⁾。これ以後エラスムスは、友を求める際にも学芸の徒としての自分を見失うことはなくなる。それどころか寧ろ学芸の徒として歩いて行く為にこそ、信頼できる仲間を求めて行くのである。

2. 「よき学芸」の同志達との間で

2.1 「友の間では全て共有」～修道院時代中期

エラスムスはラテン語に通じた修道士仲間らと手紙を交わし続ける。なかでも、コルネリウス・ゲラルドゥスという修道士とは頻繁にやり取りをするが、年上で学識も深かったコルネリウスは、エラスムスのチューター役であったとも考えられている。当時ハウダの詩人達の親睦会の活動的なメンバーでもあった彼等の往復書簡には、教父達からの引用のみならず異教徒の古典作家達も名を列ね、活発に交わされた文芸論が残っている。

「一般的な絵画が芸術的な絵画と異なるように、一般的な詩人は学識のある詩人とは違う。そして絵が美しいと評されるためには、様々な色彩の魅力やそれらを引き立てる技術、バランス、芸術家の専心と入念さ等かなりのものが付け加わらなければならない様に、詩作においても、その詩が称賛に値するためには多くの掟が守られていなければならない。」⁽¹⁴⁾

同じ道を志さんが故に「妬み深い嫉妬心」が生まれ得ることを警戒し「時にお互いの個性に譲歩し合わなければならないとしても、友情によっては結ばれ続けていこうではないか」と語りかけるコルネリウス⁽¹⁵⁾へ、エラスムスは次のように返事をする。

「君も書いていた様に、嫉妬や競争心を思わせるもの、付け加えれば友好的でない疑いも、僕らの仲からは追放されるべきだ。敵に何か不吉な呪いをかけたりしないように、先に我々の間にそのようなものを持ち込んだ敵を神が遠ざけてくれんことを。真摯に喜び、君を讃える代わりに君を嫉妬するような

ことがどうしてできようか。これほどまでにあつい友情のもとに抱擁すべき君のことなのだから、君がどんな功績や名声を手に入れようと、それによって自らの分け前が増えたようにしか思わないだろう。真実を語っている古い格言があるではないか。「友の間では全て共有」だ。それとも君は、僕がしばしば自分以外の誰も 公平な心でもって許容することができなかつたり、自分の意見にそぐわない人々は直ぐさま胸ぐら掴んで、叩きのめすべきだと考えるほど気難しい人間だと思っているのかね。知らないことや認めないことは即座に非難するべきだと考えている人は確かに存在するけれど、僕はその仲間に入れられたくはないものだ。」

「僕には、僕の指導者がいる。もし君が他の人物を挙げるとしても、それで気を悪くしたりなどしないよ。詩ではウェルギリウス、ホラティウス、オウィディウス、ユヴェナリス、スタティウス、マルティアヌス、クラウディアヌス、ペルシウス、ルカヌス、ティブルス、プロペルティウスが僕の作家だ。散文ではケケロ、クインティリアヌス、サルスティウス、テレンティウス。文体の典雅さの規則については、ロレンツォ・ヴァッラほど信頼している人物はいない。」⁽¹⁶⁾

エラスムスは生涯に幾度か推薦すべき古典著作家のリストを作成するが、その最初のものがこれである。後に『学習計画』の中で推薦する著作家らと比較すると興味深いのが、自らの学習の指針たるこの著作家一覧には、ラテン作家ばかりでギリシャ作家は挙げられていない。だからといって彼がギリシャ語の本格的な修得に関心を持っていなかった訳ではないことは、「ギリシャ語にもラテン語同様に精通していた」ルドルフ・アグリコラへの称賛の念のこもった言及⁽¹⁷⁾からして明らかである。

ここで興味深いのは、エラスムスやコルネリウスが書簡のなかで話題にしている作家の中には、ステインやその周辺の修道会の図書館には収められていなかったものも少なくないという事実である⁽¹⁸⁾。修道院のなかで歓迎されてはいなかったはずのこれらの書物を、エラスムス達は何らかの手段で入手し、陰で回しあっていたと思われる。

古典学芸を志す数少ない修道院仲間にも囲まれながら、この時期、エラスムスは後に出版されることになる幾つかの作品の草稿を綴ってもいる。そのうちの 하나가、中世的で偏狭なキリスト教の立場からの攻撃に対抗して、異教の古典文学を擁護することを主題に対話形式で書かれた『反蛮族論』*Antibarbarorum liber* (1520) である。この著作の序文の草稿と考えられる文書が、コルネリウスに宛てられている。

「僕は丁度対話の部分に懸命に取り組んで、登場人物各々に固有の性格と特色を与えようとしたのだが、それも君の願いが叶うように、学識ある人々が僕の努力の価値を認めてくれるように、無知な人々が見て羨むように、生半可な知識者や気取った人たちが赤面するように、そして普通の人々がそこから何らかの利益を引き出せるようにと思っただことなのだ。」

「普通の人々は、学識者の書いた論文や詩を読んで激しく心を動かされ、その文章が導く方向に押し流されるのだが、何が彼等を感じさせたのか理解することはない。僕の作品を読めば少なくとも彼等は、彼等をこれほどまでに惹き付けるものが何なのかを部分的にでも捉えられるだろう。君もだ、我がいともしきコルネリウスよ、君も僕の作品から何らかの利益か、さもなくば幾らかの楽しみを引き出せるよう願っているよ。もし何も引き出せなかったとしても、愛情深き友としての役割は果たしたことになるだろうね。」⁽¹⁹⁾

エラスムスがここで「普通の」しかしよき学芸に触れ、それに感動し、惹き付けられている人々を対象として明らかにした『反蛮族論』執筆の意図は、極めて教育的なものであると言えよう。エラスムス

は一步進んだところにいる立場から、学芸における後輩である「普通の人々」に古典学芸の魅力を解きあかしてみせることで、彼等が学芸への理解を深め、さらに邁進して行くことを期待している。この「人々」への心遣いの根底に横たわるのは、エラスムスが望んで止まない「友」への愛情だとも読み取れる。自ら持てるところのものを書き物の形であらわし、人々と分かち合うことへの欲求を、「友の間では全て共有」を掲げたエラスムスは人一倍強く持っていたのである。

2.2 自由な一ユマニストとして

1489年末に書かれたとされる手紙を最後に、エラスムスのステイン修道院時代の後半の様子を伝える書簡は一通も現存していない。1492年にユトレヒト司教ダヴィド・ド・ブルゴーニュのよって司祭に叙階されていたエラスムスは、その翌年、修道士の身分のまま、カンブレー司教ヘンドリック・ファン・ベルヘンの秘書となり、修道院を出る。

そもそもエラスムスは、枢機卿に任命されかけていたカンブレー司教に同行してイタリアを訪れ、古典研究をさらに進める機会を得ることを期待していた。しかし司教の思惑もはずれ、エラスムスはしばらくの間カンブレーやブラッセル、西ブラバントのベルヘン・オブ・ゾーム付近を往復しながら秘書としての仕事に追われることになる。主人のカンブレー司教は、神聖ローマ帝国皇帝マクシミリアン一世とマリー・ド・ブルゴーニュの子息である大公フィリップ・ル・ボーの摂政顧問の一員であった為、エラスムスはブラッセルの宮廷にも頻繁に出入りすることになり、フランス語による宮廷生活の仲間入りをする。

しかし、この時期の書簡をみるとエラスムスの望んでいたものは宮廷人達の世界にはなかったことは明らかである。彼は時間を作っては、修道院時代からの古典学芸を志す友達に対して筆を執り、自身の古典研究の近況を伝えている。またベルヘン・オブ・ゾーム市の書記で、ここに人文主義的な学校を開設したばかりであった人文学者ヤコブ・バット Jacob Batt (1464?-1502) と知り合い、あつい親交を結ぶようになるのは、エラスムスの新しい生活が始まって間もない時期だと考えられている。エラスムスは『反蛮族論』に手を加え、そのなかでの中心的役割をこのバットに担わせて書き換えている。

そのバットの勧めにより、エラスムスがカンブレー司教の援助のもと神学研究の為にパリに赴くのは、1495年頃のことである。中世以来の神学の最高峰ソルボンヌ大学に登録し、貧しい学生の為の教育施設であったモンテーギュ学寮に寄宿しながら、エラスムスは神学博士号の取得を目指すことになる。当時のソルボンヌは未だ中世のスコラ哲学の影響のもとにあった。エラスムスはそのでの授業に不満を抱きつつも甘んじ、大学の外に人文主義の知的刺激を求めた。

そんな彼が憧れた人物の一人が、当時パリでもっとも名の知られた人文学者であったロベール・ガガン Robert Gaguin (1433-1501) だった。エラスムスは敬愛するガガンの気に入られようと、何通かの手紙を書き送り、ガガンから好意的な返事を受け取る。

「君から貰った手紙や詩から察するに、君はれっきとした学識人だ。だからこそ、君が私の友情を切望するのと同じように私は君からの友情を望むのだ。同じ学芸への執着は友情を確固たるものにするに役立つものだ。」²⁰⁾

エラスムスには実際に、ガガンによって一人前の人文学者として認められる。1495年9月に上梓されたガガンの著作『フランス起源論』De origine et gestis francorum compendium を読んだエラスムスは早速10月にこれを賞賛する手紙をガガンに書き送るが、ガガンはこの手紙を二年後のリヨン版から巻末に挟み込むのである。これがエラスムスの文章で最初に活字化されたものとなる。

人文学の大家ガガンから、エラスムスは多くのことを学ぶ。ガガンはエラスムスに宛てた手紙中の大袈裟な表現を注意深く戒め⁽²¹⁾、『反蛮族論』草稿に目を通しては、主人公バットに担わせる演説が長過ぎることを指摘し、対話形式の作品に長けたプラトンやキケロを見習うよう忠告している⁽²²⁾。しかしこの点を除けば『反蛮族論』に対する彼の批判は全般的にかなり好意的であり、エラスムスはこの師から、大いに自信を持たせてもらったに違いないと思われる。

こうしてエラスムスは、一人のユマニストとして世に出、着実に歩み始める。1496年初頭にはこのパリの地でそれまで書きためた詩を集めて出版する他、修道院時代の友人ウィレム・ヘルマンズの詩集を編纂し、その出版を試みている⁽²³⁾。このヘルマンズの詩集の後書きを飾ることになるカンブレー司教宛てのエラスムスの手紙には、彼の陶冶観があらわれている。エラスムスは、ヘルマンズの詩の価値を司教に説いて言う。

「実はそこには、あなたが常々大きな価値をおいていた二つの資質が組み合わさっているのです。それは、優れた教養と類なき忠誠です。二つの資質は結合して、最も美しく、最も完璧でまた最も非凡なものを作り出しています。性格は尊敬すべきなのに、この教養が欠けているのが悔いられるといった人がたくさん存在しています。教養無しには徳もいわば不完全にのようと思われるものです。」⁽²⁴⁾

また逆に才能のある人が、空しい栄光だけを追ったり無信仰に走ったりするのも嘆かわしいことだ、とするエラスムスだが、彼自身が神学研究と「よき学芸」の探究に励むことで目指したのも、徳と教養という二つの資質を磨くことであったのだろう。

そしてまた、エラスムスにとって学芸の道は、彼が求めて止まない友情を育む場でもあった。彼は、知り合ったばかりの聖アウグスティノ会修道参事会員に宛ててこう記している。

「私たちの間にはこれまで親密さのかけらもなかったと言うのに、これほど迄に激しい感情を覚えるとは如何なることであろうか。恐らく私は生まれつきあらゆる種類の友情を結ぶようしむけられているのだろう。それにしても、よき学芸の熱烈な愛好者のこととなると、私は敵対者達でさえ愛するまでになるのだ。だから、私と同じようによき学芸に専心しているあなたのことを、どうして最も親愛なる友の一人としてみなさないでどうしていられようか。キケロの意見によればこのよき学芸は、互いの愛情のもっとも頑丈な絆である。」⁽²⁵⁾

学芸の道を順調に歩み始めるエラスムスであったが、それによって名声を獲得することよりも、「絆」によってより多くの人々と結びつき、友情を交わせることの方により強く惹かれていた様子がかがえる。

3. 家庭教師エラスムス (1497~98年)

3.1 家庭教師エラスムス

パリで当初エラスムスが寄宿していたモンテーギュ学寮は当時、メヘレン出身で、エラスムスと同じく共同生活兄弟会系の学校で教育を受けた経歴を持つジャン・スタンドンク Jean Standonck (1443?-1504) を寮長として、厳格な規律のもと運営されていた。そこでの禁欲・節制を旨とする過酷な生活は、身体の強くないエラスムスには堪え難いものであり、健康を害した彼は一時期ネーデルラントに帰っている。1496年秋にパリに戻ったエラスムスは学寮へは帰らず別に下宿先を定めるが、その結果カンブレー司教からの乏しい仕送りだけでは生活できなくなり、パリに在る良家の子弟にラテン語の家庭教師を行って糊口を凌ぐようになるのである。

1497年から1498年にかけてエラスムスが生徒達との間に交わした書簡が十数通現存しており、彼の「指導」の内容を伝えてくれる。その一つがリュベックからの留学生クリスチャン・ノルトフに宛てられたものである。エラスムスは「自らが子どもの頃から辿って来た過程」として勉強に向かう際の注意事項を「親愛なるクリスチャン」の為に綴る。

「授業には注意深く勤勉に向いたまえ。過剰な努力は時折生徒のもって生まれた才能を窒息させてしまうこともあるものだが、それとは逆に勤勉さは持続されうる中庸の美德である。この徳は人が想像する以上に日々の実践で積み重なっていくものなのだ。何事につけうんざりすることは禁物であり、特に学芸においてはそうである。従って勉強することに伴って生じる精神の緊張を時折ほぐしてやらねばならない。ここで遊びが挿入されるわけだが、遊びと言っても育ちの良い人間の為にある、良き学芸に相応しく、この水準を保った遊びのことである。寧ろ学習の中にさえも、苦勞よりも喜びの方に我々の気を引いてくれるような持続的な魅力を持たせるべきと言おうか。どんな努力も、勉強に向かう熱心さを引き止めるような喜びを人に与えることがなければ長続きはしないものだ。」

「今直ぐに、よりよくそしてより容易に物事を学ぶことを君に可能せしめる勉強方法を獲得するようにし給え。こうして職人が自らの作品をより完全に、より素早く苦勞せずに仕上げることは彼の職業上の知識のお陰といった具合になるのだ。仕事にあわせて君の一日を分割するのだが、その際には大プリニウスや教皇ピウス二世のような、我々の記憶に大きな足跡を残した者達を真似ることだ。まず初めには、これは肝心なところなのだが、注意深くどん欲に教師のする説明に耳を傾け給え。そして彼の解説を追ってだけで満足せず、時には先手を打ってみるのだ。教師の言った全ての言葉を記憶に、最も重要な事は忠実な言葉の管理人であるノートに預けるようにせよ。とは言えどもセネカが語っている馬鹿な男—自分の奴隷が記憶したことは全て自らの知るところとなると思い込んでいた人物であるが—のように、余りノートを当てにしすぎてはならない。沢山の知識を書き込んだノートだけがあって自分自身には何も無い、といった状況を作るような過ちを犯してはならない。聞いたことをやり過ぎしてしまうのを避けるために、聞いたことは一人か若しくは他の人と一緒に繰り返して言うてみるのだ。これだけでも満足することなく、聖アウグスティヌスが知性のためにも記憶のためにも最上の訓練だと言っていることであるが、沈思黙考することに一日のうち幾らかの時間を割くことを忘れないようにし給え。議論の場もまた精神の筋肉を立て直し、それを刺激して強化する運動場である。疑問があれば質問することを、間違っていたら正すことを恥じてはならない。」

「夜更かしして眠い時に勉強する事は避けるように。そんなことをすると知性の光を鈍らし健康をもひどく害することになる。曙は詩神達の見方で、学問の為にあるものだ。食事の後は遊びにいたり、散歩や楽しいことを友達としたりするのだ。それも学ぶ為の一つの方法であろう。食い意地ではなく健康に基づいて食事は節制することだ。夕食の前後には少し散歩をし給え。寝る前には美しく記憶するに足る書物のページを繰り、寝入るまでの間、そのことを考えられまた目覚める時再びそれに思いを至らせられるようにするのだ。(勉強に向けられない時間はすべて損失の時間である)とのプリニウスの言葉が君の精神に常に宿っていますように。」⁽²⁶⁾

3.2 教師の役割と友愛

しかし、このような学習活動を行うにあたって何より肝心なのは、それを指導すべき教師を選択することだ。エラスムスは最初にこう断わっている。

「まずは非常に学識の深い家庭教師を選ぶよう注意することだ。何故なら自ら学を授かることなしに

他人をよく教育出来る者などいはいないからである。優れた教師を見つけたら直ぐに彼が君に対して父親のような感情を、君が彼に対して息子のような感情を抱けるようにあらゆる策を講じるのだ。これには正当な理由がある。実際我々はよき人生の規律を教えてくれる人には、生を授けてくれた人と同じくらい負っている。この相互の友情は学習にとって非常に大切なものであり、友人にしたいくはないような人物を教師とする事は無駄である。』⁽²⁷⁾

愛情深い思いやりから学芸に打ち込むことを友に勧め、かたい友情で結ばれた同志で古典作家や文法家について議論し合い、友好関係を求めるなかで著名なユマニストから指導に与ってきたエラスムスが、生徒を持つにあたって何よりも重視したのは、教師と生徒の間にあるべき友情・信頼関係なのだった。またエラスムスはある時、第三者の手により彼の元から離されたばかりだったイギリス人留学生トーマス・グレイに宛てて次の様に書いている。

「堅固な友情とは、徳に根ざしたもので、徳そのもの同様に終わるところを知らない。何利害関係から生じた友情は、そのあてにされた利益が無くなれば簡単に失われてしまうものである。快楽の追求の結果愛し合う様になった者達は欲求が満たされた途端に別れてしまうだろう。また愛情の子どもっぽい発露にまかせて愛情表現をする者達は、この友情を結んだときと同じようにいとも簡単にこれから離れるものだ。より優れたところに源を発している私たちの友情は、はるかに堅固な土台に立脚している。それは利害でも快楽の追求でも子どもっぽい熱情でもなく、学芸と我々の共通の学業への高貴な愛情である。』⁽²⁸⁾

従って、ラテン語の教授という場を失ったとしても、この生徒とエラスムスとの間に築かれた友情は、双方が古典研究を志す限り、二人を結び付け続けるはずなのだ。だからこそ、エラスムスはトーマス・グレイに向かって、自分という家庭教師を失ったことで勉強から離れるのではなしに寧ろ「もし君が私の事を惜しむなら、その気持ちを、弛みなく学芸へ打ち込むことで示してくれ給え。』⁽²⁹⁾と懇願するのである。

3.3 エラスムスと人文研究

それではこの古典研究、「よき学芸」とはエラスムスにとって何だったのであろうか。エラスムスはトーマス・グレイに宛てた手紙の中で、こう告白している。

「私が運命に屈しなかったのは、学問のお陰なのだ。』⁽³⁰⁾

また、彼が生徒の名で筆をとったクリスチャン・ノルトフへの手紙には、次の様な興味深い行がある。「よき学芸だけが人間に相応しい富なのだ。これは運命によって与えられも奪われもされえない。行使することで増大し、決して疲弊しはしない。それは傷むかわりによく行くと。身体の美しさや力と同時に老化はしない。それは栄達のように無能な人の手に落ちたりはしない。人を徳から背けさせたりせず、徳を磨かせる。魂の安らぎを与える唯一のものであって、我々をいつでも受け入れてくれる心のよりどころであり、一言で言えば、これ無しには我々は人間たり得ない。』⁽³¹⁾

聖職者を父に庶子として生まれ、社会的ハンディキャップを背負っていること、幼くして両親を失い愛情に飢えて過ごした少年時代、なかなか叶わぬ人文研究の都イタリア訪問の夢……そんな「運命」の重みに押しつぶされることなく生きて来れたのは、常に「よき学芸」という見方があったからに他ならない、とエラスムスは言う。「運命」は決して平等には各人に与えられないが、打ち込めばそれだけ増える「富」である古典研究と、それによって養われる教養の前では人間は皆平等である。それは人間の宿命たる老いをも超越する。エラスムスは他の箇所でも、学識ある人独特の落ち着きに言及するが、それは

徳を磨き心のよりどころを獲得している人の特権たる静謐である。この世に生を受けた我々であるが、人間らしく在る為には「よき学芸」が必要なのだ、とエラスムスは言明するのであった。

終わりに～まとめと今後の展望

現存するエラスムスの書簡のうち、初期のものを検討する場合には、途中で書簡の持つ性格が変わっていることに注意する必要がある。本稿 1.1 で扱った書簡は感情的なものばかりであり、歴史家のなかには、そこに単なる文体練習を見出す者も多い。しかしこれらの、エラスムス自身は決して出版しようと思わず、実の所恥じていたと言われる手紙からは、気取らない地のエラスムスが捉えられる可能性があると言えよう。それに対して本稿 2 で扱った時期以降の書簡は、多かれ少なかれ書簡集としての出版を意識しながら書かれたものであり、より公的な性格をもったものである。特に家庭教師時代(本稿 3)の手紙の中には、模範書簡と呼ばれる、文体のテキストとしての意義も持ち合わせた書簡が在り、そこにエラスムスの私的感情を見出すことは非常に難しい。

従って本稿で扱ってきた書簡の検討に際しても、ごく初期の頃の感情的な調子と家庭教師時代に用いられている調子との落差に関しては、上記の事情を鑑みる必要がある。しかし、そのことを念頭に置いて、ここに読み取れるエラスムスの変化、成長は明らかであろう。

それは、当初「愛情の子どもっぱい発露にまかせて」友を求めていた彼が、より深く古典研究に没頭するにつれ、そこに「心のよりどころ」見出す様になり、平静さを獲得していく過程の様に見受けられる。既に見た通り、早くも二十歳のころからエラスムスは友への思い遣りの表現として、友の古典研究を助長すべく指導的・教育的役割を選んでいく。それ以後、修道院での「よき学芸」仲間達との意見や情報の交換や、バット、ガガンと言った人文学者とのやり取りを経て多くを学んだエラスムスは、一人の若きユマニストとして成長すると同時に、友を求める気持ちの「生まれつきの」強さ故に、自分の学習経験をもとに他者(友)に対して学問上の援助の手を差し伸べずにはおれない、一人の教師となっていく。二十代後半に家庭教師として生徒を持つようになる頃迄には、他者を指導できるだけの教育的視点、態度を持つに至っていたことが、本稿で見た書簡からは読み取れる。

その一方で、これらの書簡と著作『学習計画』の間には大きな隔りがあることも確かである。『学習計画』で展開される学習・教育理論は、1498年迄の書簡には見られない。またギリシャ語の本格的学習は、初めて英国を訪れた1499年以後だったと言われるエラスムスだが、実際本稿で検討した1498年までは、書簡の中で引用・言及されるのもラテン作家が大部分を占める。『学習計画』では、ギリシャ語原典に遡って行くべき読書の重要性が説かれ、そこに掲げられた読書リストはギリシャ作家を寧ろ中心に作られているが、これは1499年以降にエラスムスが修得した知識の反映と考えられる。パリを立ち英国へ向かったこの時期から『学習計画』出版の1512年迄のエラスムスをその書簡に追い、彼の教育プログラム確立の背景を探ることが、筆者の次の課題である。

注

- (1) Allen, P. S., *Opus epistolarum Desiderii Erasmi Roterodami*, vol. I, Oxford, 1906. 以下このアレン校定版書簡集(Allenと略称)からの引用については、略称・巻数・書簡番号・頁数で出所を示すことにする。
- (2) Gerlo, A., éd., *La Correspondance d'Erasmus*, vol. I, Brussels, 1967.
- (3) Halkin, L.-E., *Erasmus parmi nous*, Paris, 1987.
- (4) Hyma, A., *The Youth of Erasmus*, 2nd edition, Michigan, 1968.

- (5) Allen, I, 7, pp. 79-80.
- (6) Allen, I, 8, pp. 81-82.
- (7) Hyma, op.cit., p. 160.
- (8) Allen, I, 13, p. 86.
- (9) Allen, I, 13, p. 87.
- (10) ピタゴラスの金言
- (11) Allen, I, 15, pp. 88-89.
- (12) Allen, I, 15, pp. 89-90.
- (13) Halkin, op.cit., p. 24.
- (14) Allen, I, 27, p. 116.
- (15) Allen, I, 19, p. 96.
- (16) Allen, I, 20, pp. 98-99
- (17) Allen, I, 23, p. 106.
- (18) Hyma, op.cit., p. 159.
- (19) Allen, I, 30, pp. 121-122.
- (20) Allen, I, 43, p. 147.
- (21) Allen, I, 43, p. 147.
- (22) Allen, I, 46, pp. 153-154.
- (23) ヘルマンス Willem Hermans の詩集は『歌の森』*Sylva odorum* と題され、パリの G. Marchand 書店から 1497 年初頭に出版される。
- (24) Allen, I, 49, p. 163.
- (25) Allen, I, 52, p. 167.
- (26) Allen, I, 56, pp. 172-173.
- (27) Allen, I, 56, p. 172.
- (28) Allen, I, 63, p. 189.
- (29) Allen, I, 58, p. 179.
- (30) Allen, I, 58, p. 176.
- (31) Allen, I, 61, p. 183.